

ドストエフスキーと生

近田, 友一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

1990-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004549>

ドストエフスキーと生

近田友一

I

ドストエフスキーは首都帰還後の翌年——一八六二年に特異なフェリエトン『詩と散文によるペテルブルクの夢』を発表している。この文章はペテルブルクという都のもつ奇妙な幻想性をモチーフとしているが、とくに目に立つのは冬のネヴァ河の夕景を丹念に描写した個所である。それは彼の若年の頃の印象としてかかれている。

ネヴァ河に近づいたとき、私は一寸足を止め、もやっている遠方を河沿いに鋭く見やった。霞んだ地平線の向うで燃え尽きようとしている夕焼けの最後の赫紫色にそれは突然染めあげられた。夜が街に拡がって、雪が凍って盛り上がったネヴァ河の広大な川面には落日の反映とともに、あたり一面数限りない針のような霜の火花がまき散らされていた。寒さは零下二十度にもなってきた。

冷たい湯気が疲れ切った馬からも走って行く人々からも立ちのぼった。凝結した空気はごくわずかな響きにも震えた。両側の河岸に並んだ家々の屋根からは、みな巨人のように煙の柱が幾筋も立ちのぼって、寒々とした空を途中でもつれたり、解けたりしながら上へ上へと動いて行く。新しい建物が古い建物の上に立ちあがり、新しい街が空中に造りあげられたかのようにであった……つまりそこに住む人々、強者も弱者も、彼らの住処も、乞食の隠れ家も、金殿玉楼もすべてこの黄昏の一刻には、ファンタスティックな魔法めいた幻影に似通ってくる。そして次にはその幻が忽然と見えなくなり、湯気になって蒼黒い空に消え失せてしまうのだ。急に何か不可思

謙な想いが私の中で動き始めた。私は身震いした。その瞬間、私の心には力強いこれまで知らなかった感覚が
 みち溢れて、突然沸き立った血の熱い泉に満たされたような気がした。私はその時、今まで心の中で蠢いてい
 るばかりでまだ意味のとらえられなかった或るものを悟ったかのようであった。それはさながら何か新しい或
 るもの、全く新しい世界が見えてきたかのようであった。ただ何か漠とした噂によって幽かに知っていただけ
 の、私には未知の新しい世界であった。まさにこの時から私は私の存在が始まったものと考える……⁽¹⁾

この文章とほとんど同じものをドストエフスキーはペトラシエフスキー事件以前にすでにかいている。一八四六
 年の短篇『弱い心』は善良で純真な弱者の主題と「空想主義」のモチーフを結びつけた作品だが、発狂した主人公
 ヴァーシヤを精神病院に送った帰途、アルカージイはネヴァ河畔で「幻想」をいだく……十五年余の歳月をへだて
 てドストエフスキーは再び同一ともみえる幻想をもちだした。異なっているのは作者がわざわざ「急に何か不可思
 議な想いが……」以下の文章をつけ加えたことである。ドストエフスキー自身、若年時の印象をもう一度確認して
 みたかったのである。彼が『弱い心』で描いたネヴァ河の夕景は、「幸福のあまり」発狂する主人公ヴァーシヤ
 の非現実性を補うための非現実的な風景描写であったが、それが単なる心象風景ではなかったことを作家は知った
 ——感性のみで捉えていた対象を認識の対象にする必要性をドストエフスキーは「正確に」感じていた。「新しい
 世界が見えてきた」というのも「私の存在が始まった」というのも誇張ではない。彼はこの光景のなかに、彼の好
 きな言葉で言えば、「永遠の根柢」に触れるものを感じとっていたのであろう。

セミョーノフスキー練兵場で見た「金色の光」は現実の底にもう一つの世界があるかも知れないことをドストエ
 フスキーに教えた。この「二重性」をめぐる考察は以後彼の文学の底流を流れつづけることになる。

II

一八六十年代の初頭からドストエフスキーは創作プラン、感想、メモなどをかきとめておくノートを使用してい
 るが、現存する十一冊のノートの二冊目に、最初の妻マリヤ・ドミトリエヴナの死の直後の作家の率直な心情が記

されている。そこに述べられているのは、「不幸がひどければひどい程一層愛し合った」愛憎つねなき亡妻についての感傷でも感想でもなく、もっと根源的な問である。

四月十六日。マーシャがテーブルに横たわっている。私はマーシャにまた会うだろうか？ キリストの戒律に従って自分自身のように人を愛することは——不可能だ。地上の個の法則が縛る。自我が妨げる。キリストだけがなし得た。だがキリストは絶えることなき太古からの理想であり、人間は自然の法則によってもそれを目指さなければならぬ——ところが肉体をもった人間の理想としてのキリストの出現以後は、個性の最高の最終的な発展は（発展の最終段階において、目的達成のその時点で）、人間が以下のようなことを発見し意識し自分の本性の全力を以て確信するに至らなければならぬ——ということが白日のごとく明らかになったのだ。それは他でもない——人間がその個性を、完全に発達した自分の自我を用いることの出来る最高の使い方は、言ってみれば、この自我を抹殺し、それをすべての者に、各々に完全に、献身的に捧げるようにすることである。(2) 『手帖——一八六二—一八六四年』

マリヤの病勢の昂進、死と『地下室の手記』の執筆、発表は重なっている。このことからこの時期のドストエフスキーのキリストへの想いを心搏つものにとらえる評家もいるが、事実はもっと差し迫ったものであったろう。なによりもマリヤの死は、突きつけられた現実の死の形としてドストエフスキーに迫っている。父ミハイルの横死は深刻ではあったが、抽象的であった。マリヤの死は目の前にあって彼に解答を求めている。ドストエフスキーの口から素朴な呟きが洩れる——「マーシャにまた会うだろうか」……

死が現実の存在の究極ならば、一切の存在の形は死によって規定される。生と死の時間帯を死と再生の間に移して存在を考えることはできない。死に至る存在としてのみ存在があるならば、人間は宇宙の渺たる粒子にすぎない……彼の存在を一瞬にして無にしようとした「金色の光」の向うに在ったものは何なのか——眼前のマリヤの遺骸は、ゆくりなくもキリストの死を連想させ、イエスの存在の意味を想起させたのであろう。人間の最高の理想であるイ

エスのみが死と再生をつなぐ時間を考えることができる唯一の存在である。人間がイエスに等しい存在の形をもつならば、再生は可能であろう。だが、それがあり得ないことだとすると、この世界の現実だけが唯一の現実である。この現実だけなのか、現実を超えた何かがあるのかに一切は尽きる。マリヤの死は、人間存在が死から逆照射された形しかないことをドストエフスキーに改めて認識させた。「何か」がないとするとマリヤの死が意味するような存在の形が人間のただ一つの生の姿である。マリヤの死を契機としてドストエフスキーは存在の問題を根源的に問おうとしている。

Ⅲ

地下生活者には自己の存在の形に対する苛立ちが素朴な形で表われている。二二ヶ四の支配する地上の世界を否定し、石の壁を前にして穴蔵の中で自虐の快感にひたる地下生活者は、何よりも自己の存在そのものを守ろうとした。科学的合理主義の否定というような抽象的なことよりも、どうしようもない自分自身の存在への苛立たしさが先行している。勿論この作品には後の小説にみられるような存在の形への問はない。ただ直感的に彼は自分の生の姿を正確に捉えている。『地下室の手記』が『罪と罰』のプレリュードとして位置づけられているのは、この点からも故なことではない。

『罪と罰』は「行き場」を主題とした小説である。ラスコーリニコフはマルメラードフから「行き場」を求めていることを指摘されて衝撃をおぼえる。彼は「非凡人」の理論を案出するが、彼自身誰よりもこの「思想」を信じていない。それは彼が苦しまぎれに考え出した一つの「行き場」である。ラスコーリニコフの「行き場」は新しい存在の形への探求である。それは地下生活者の袋小路から脱出して地上の世界で生きる可能性を模索することであり、そこには必然的に人間の存在の新しい形がなければならぬ。ラスコーリニコフはこの「思想」の保証を実行にもとめた……

彼の老婆殺しは倫理の次元の問題ではない。表現としてそうみえてもラスコーリニコフの心の中にあるものは違う。

一体どういうわけで俺の思想は、開闢以来この世にうようよして互いにぶつかり合っている他の思想や理論より愚劣だったのだ？ 完全に独立不羈な、日常茶飯事の影響からのがれた、広い視点で事を観さえすれば、その時は勿論、俺の思想も決してそれ程……奇怪ではなくなってくるのだ。おお、五カベイカ銀貨の値打しかない否定論者や賢人たち、何故君たちは中途半端なところで立ち止るのだ！^③（『罪と罰』エピソード二章）

ラスコーリニコフはこれまでの人間の思想とは異なったところにあるものとして彼のそれを位置づけようとしている。神への「故ない畏怖」を否定することによって、人間は新しい存在の場に出るとラスコーリニコフは信じてうとした。彼の「新しい第一歩」という言葉にはこの意味が象徴されている。単なる宇宙の粒子として生成する存在にラスコーリニコフは耐えられない。

スヴィドリガロフはこの点で異なる。彼は粒子にすぎない自分を正確に認識している。彼は来世を認めているが、それに希望をもってはいない。永遠は虚であり、人間を支えるものではない。世界の断片がときどき現世に現れるというスヴィドリガロフの表現は面白いが、彼の意識の中では来世——他界と永遠とは截然と分れている。永遠が虚だということは、彼の哲学の始点でもあり、終点でもある。他界が存在しようが、しまいが、永遠が虚であることには変りがない。ラスコーリニコフの間には彼は率直に答えた。ラスコーリニコフの問返しは、その故に彼には何とも不本意なものであった。

「われわれは現に、いつも永遠なるものを不可解な観念として、何か大きなもののように想像しています。でもどうして何故必ず大きなものでなくてはならないのでしょうか？ とところがあにはからんや、すべてそういうったようなものの代りに、田舎の湯殿みたいな煤けた小っぼけな部屋があつて、その隅々に蜘蛛が巣を張っている、そしてこれがすなわち永遠だと、こう想像してごらん下さい。実はね、私はどうかすると、そんな風なものを目先にちらつくことがあるんですよ。」

「一体、一体あなたの頭にはそれよりもっと気休めになるような、もっと公平な考えは浮かばないんです

か！」と病的な感じを声に響かせながらラスコーリニコフは叫んだ。

「もっと公平な？ そりゃわかりませんよ。ことによったら、これがあなたの仰言る公平なのかも知れませんがね。それに私は必ずわざとでもそうしたいんですよ！」⁽⁴⁾（『罪と罰』第四篇一章）

スヴィドリガイロフは永遠が虚であることを認識している。虚を虚として表現するでたとして仮りに「蜘蛛の巣の張った田舎の湯殿」のようなものをおいてみた。このイメージがラスコーリニコフの神経に触れる。ラスコーリニコフが苛立ったのは、彼が必ずしも正反対の認識をもっていたからではない。むしろスヴィドリガイロフにちかい感覚を自分もいだいたことがあることを承知していたからであろう。犯行後ラスコーリニコフはネヴァ河の壮麗なパノラマに見入っている……大学に通っていた頃、何度も橋の上の同じ場所で故知らぬ「冷気」に襲われていたことを、この華やかな光景が「啞で聾の靈にみちている」のは何故かという疑問の解答を一日延ばしにしていたことを彼は突然思い出す……その体験がスヴィドリガイロフの「永遠」の観念にかさなる。

スヴィドリガイロフとラスコーリニコフは対蹠的な立場に立っているようで、そうでもない。ラスコーリニコフがそれを認めたくない意識の底で思っているだけである。スヴィドリガイロフが来世を認めているのは、自分が粒子として還って行く場所としてである。人は短時間現世に存在し、生命のエネルギーの消滅とともに他界に移行するにすぎないとスヴィドリガイロフは信じる。「永遠」が有でも無でもなく非在であるならば、そこに意味をもとめても無意味であろう。スヴィドリガイロフの思想には感傷はない。人間の存在の形を冷徹に凝視し、誇大な観念をもとうとはしない。ラスコーリニコフがスヴィドリガイロフと異なるのは、存在の形への夢のいだき方である。ラスコーリニコフも現実を超えた現実があることを識っている。ネヴァ河のパノラマは彼にとつて大きな意味をもっている。不可解な「冷気」を感じながら、それが単なる非在ではなく、すでに虚無にながれていることを感じながら、なお人間を粒子以上の存在として考えようとしている。たとえスヴィドリガイロフにからかわれても「凡人」は新しい人間存在の新しい形としてラスコーリニコフの夢想のなかで生きつづける。

IV

ドストエフスキーはムシュキンに自分の夢をのせている。それはただムシュキンにキリストを描こうとしたというようなことではない。ムシュキンは、地平の果てに人間の認識の無用になるような場所を夢想している。これは、人間の理想の一つの極点を示している。そこでは生の意味を問おうとする本性すら消失する。意味を求めることもなく、それ自体そのまま充足した形で人間は存在している……

彼はスイスで療養していた頃、真昼間よく山に登った。遙か頂上の岩の上には中世紀の古城の廃墟、眼下に彼が住んでいる村が霞んでいゝる。ムシュキンはやにだらけの松の大木に取り囲まれてたった一人山中に立っている……

太陽はさんさんと輝き、空はあくまで蒼く、怕いような静けさです。そんな時です——どこかへ行きたいという気持になつたのは。もしそのまま真直ぐにぐんぐんどこ迄も歩いて行つてあの地平線と空が接している向う側まで行けたら、そこでは一切の謎が解き明かされていて、われわれの生よりも千倍も力強く活気に溢れた新しい生を見出すことが出来るのだ、とそう思われたのです。ナボリのようなあんな大きな町が絶えず目に浮かびました。そこにはいつも宮殿と、ざわめきと、どよめきと、生命があるのです。(『白痴』第一篇五章)

ムシュキンは無人の静けさのなかで「一切の謎が解き明かされる」場所を空想している。それは彼にはその必要もないような空想であるかも知れない。彼はそういう想念をいだくにはもつとも不似合な人間である。ムシュキン自身すでにこの時点で余人には遠しなところまで達している。彼は不思議な静けさのなかに充足した宇宙の形を感得している。ムシュキンの生は自然と一致し、ズレがない。彼には本然の姿が生まれながらにして具つていて作者は観ているのであろう。

ドストエフスキーは十七歳のときにすでに「人間は宇宙の孤兒」という認識を示している。この「調和」の問題は以後ドストエフスキー文学の重要な主題となる。宇宙のハーモニーのなかにいる存在を彼は一つの理想と考へて

いた。ムッシュキンに作者が想いを託した最大の理由はここにある。

『白痴』の後半でイッポリートを設定せざるを得なくなったのは、この「調和」の問題がテーマとして浮上してきたからである。十八歳のイッポリートは十七歳のフォードル少年の認識を正確に受け継いでいる。宇宙の中での自己の存在の冷静な位置確認が彼の始点であり、彼は自分の存在が「宇宙の調和からはずれている」という概念からのがれることが出来ない。彼の「告白」はこの軸をめぐって展開する。

今ほくのそばで日の光を浴びながら唸っているいとささやかな一匹の蠅でさえもこの饗宴と合唱に加わり、自らの所を心得て、それを愛し、幸福に浸っているのに、このほくだけが見棄てられていたのだ。(『白痴』第三篇七章)

在るべき形として在るべき場に他の存在は在る。何故人間だけがそうではないのか。人間を容れる場所が用意されていないということは、本来、人間を除いて「調和」が成り立っているということである。それは、人間がいては「調和」が成り立たないということか、終始人間が無視されているかのいずれかである。この人間の「異邦人性」が人間存在の本質的形態であり、それを人は否応なしに肯定させられてきたというのがイッポリートの確信である。彼はそこに何よりも屈辱を感じる。もしこういう形でしか人間の存在の仕方がないとしたら、それを認めることは出来ないというのが彼の立場である。

余命二、三週間のイッポリートの苛立ちが彼の「思想」に影を落していることは否めない。彼が「被選別者」として、この世に生き残る者たちに羨望と憎しみをいだいたのは当然のことであり、そこからその発想が絶対者にまで及んだことは自然であろう。意味もなく短時間で抹消される存在としてイッポリートの存在は在る。彼はそういう在り方を彼に強いた絶対者を否定し、峻拒する。

イッポリートの発想が個人的なものから出たにしろ、それが人間存在全体の在り方にまで拡大されたことは重要である。彼は単なる無意味な粒子であることを拒否し、現在の人間存在の形を否定する。「調和」と無縁な、異質

な粒子であることをイッポリートは認識し、「調和」の問題をとおして人間存在の在り方に迫った。ムッシュキンが「調和」の或る形を語り、イッポリートがその対極に立つ。この点からもイッポリートの全面的否定は重要であり、やがてそれはイヴァン・カラマーゾフにつながって行く。

V

生に無執着でありながらスタヴローギンは生の「感覚」を得ようとする。彼は感覚を信じようとし、論理を信じない。彼の論理からは何も出てこない。スタヴローギンが生に淡泊になったのは、恐らく自己の存在の形に失望したからであろう。彼は自らの存在に嫌悪だけを感じている。嫌悪が彼の存在感覚である。嫌悪を噛みしめることが彼の生きている証左である。彼には「自分が単なる粒子であるかどうか」といったイッポリートを苦しめたような問題はない——それは人間の判断に委ねられる余地はないとスタヴローギンは考えている。粒子であって粒子以上のものであり得ないということはスタヴローギンには我慢ならないことであつた。恣意的に投げ出された存在としての自己を認識する以外に方途はないとしたら、それは存在自体無いに等しい……

「人神」はこれまでの被動的な、お仕着せの存在から彼の存在の形を根底から変える発想であつた。彼が存在させられるのではなく、自ら存在を司る者になること——イッポリートの否定を超えて、彼自身が存在を創造しようとする。「人神」はスタヴローギンの論理的次元での一つの結論であつた。しかし、彼はこの思想の抽象性を自身で知っていた。彼が折角の発想に集中も熱中も出来なかつたのはこの故である。

スタヴローギンは自己の思想を語らない。「人神」も例外ではない。彼の「人神」の内容については読者は何も知らないのである。彼が思想を表現しないのは自分の思想を信じていなかったためでもあろう。スタヴローギンが自分の観念を複数の弟子たちに「移植」し、その展開を試みようとしたのも、客観的に自己の思想を検証しようと考えたからであるように思われる。スタヴローギンの原型「人神」がいかなるものであつたか知る由もないが、「人神」の観念はキリーロフのなかで自己増殖し、異常な発展を遂げることになる。

技師キリーロフはスタヴローギンから受け継いだ「人神」の観念を独自に展開させた。人間存在を規定するもの

は死であり、人間が死への存在である限り有史以来の在り方から逃れることは出来ない。この存在の形に縛られている間は人はこれまでの他律的な生を踏襲せざるを得ず、異なった在り方を探求することは不可能である。人間が旧来の生に束縛されているならば、絶対の自由を手にすることを断念するしかない。人間に選択の自由があり、その存在の形を選ぶことが可能ならば、人類は新しい歴史に入るであろう。

キリーロフは死を超える存在の可能性を「人神」に求め、新しい存在の可能性を探ろうとした。死に恐怖をいだき畏怖している限り、人間に絶対の自由はない。「人神」は絶対的自由の象徴である。他律的な生をなんとしても自律的なそれに変えようというのがキリーロフの志向であった。

ドストエフスキーがキリーロフで描きたかったのは、人間を超えた地点で逆に人間を眺め返すという試みであったろう。始めも終りも知ることを得ない無明のなかで、「生かされて在る」という自覚の深化をひたすら求めることによって、他律のなかに自律を獲得しようとする立場も、絶対者の存在を認めず、宇宙にはただ無目的な万象の流転があるだけだとする即物的な見解も作家にはなお不足であった。「人神」論は奇矯にみえながら、それは自律的な存在の可能性を探る一つの試みであったのであろう。ドストエフスキーはキリーロフによって認識の新しい地平を拓こうとしたとも思える。

キリーロフはスタヴローギンと異なつて雄弁であり、多々「思想」を語っているが、現在ある形の生を人間が脱却しない限り人間の真の生はあり得ないというのがその想念の根柢にある。これまでの生をただ継続しているにすぎないならば、人間は相対的自由のなかで生きつづけるだけである。人が相対的自由のなかで生きている限り現在の存在の形しかない。限定された存在形式、限られた思考パターンの範囲内で人間は歴史を反復して行くこととなる。神を失い、絶対者に依拠しない時代に入った人類はそこから新生の歴史を始めねばならぬ。キリーロフが考えたのは、人間存在の革命である。彼は神なしで生きねばならぬ時代の道標を仮りに「人神」に求めた。「人神」の觀念が突飛でもさして問題ではない。彼が新しい人間存在の形を考え、先取りしていることに意味があるのである。

今の人間は真の人間じゃありません。今に幸福な、誇りにみちた新人が出現する。生きても生きていなくて

も同じになった人が、すなわち、新人なのです。苦痛と恐怖とを征服した人は自ら神となる。そうすると、今までの神はなくなってしまうでしょう。(『悪霊』第一篇第三章八)

存在が時間によって限定されるとすれば、生そのものに對する意識を変化させる他はない。「生きても生きていなくても同じ」ということは、時間の壁を超えるということであろう。その時点で人間の意識は大きく変り、有史以来の人間存在に「革命」がおこるとキリーロフは確信している。

スタヴローギンは自分に原点をもつ「人神」の予期しない展開に戸惑いを隠せない。彼は「現代では難しそうだ」と気難しげに呟くだけである。スタヴローギンにはキリーロフのような妄想はない。この意味ではスタヴローギンは常識的地上のであり、キリーロフの飛躍とは無縁である。

作者がスタヴローギンとキリーロフを対置させたことにはそれなりの意味があるであろう。ドストエフスキーはその宿痾のために常人とは異なった「時間」の感覚をもっている。発作時の時間は「永遠の今」であり、時間の停止と宇宙の調和を体感する。キリーロフに同じ宿痾を与えたのも偶然ではない。キリーロフの「生きても生きていなくても同じ」という発想はこの感覚と重なる。ドストエフスキーはスタヴローギンの悟性を超えて、不合理ともみえるこの生死一如の思想をあらわしたかったのであろう。キリーロフには作家の重心が意外にかかっているようにみえる。

VI

『未成年』の創作ノートをみるとヴェルシーロフはスタヴローギンの後裔——中年のスタヴローギンとして構想された痕跡がある。ただヴェルシーロフにはスタヴローギン以上に明確な信念があり、表面に現れたエネルギーがある。謎めいた行動も少ない。ノートの「彼」は決定稿の主人公よりなおその思想ははつきりしている。このことは『悪霊』完成後ドストエフスキーの企図した構想の軸芯が何処にあったかを知るうえで看過出来ない一点である。

思想はこうだ——地上の何ものをも尊重しないという行動原理を「彼」は理論的に作り上げた。だが実生活では、「彼」は全く地上のことに囚われ放した。生きることが恥すべきことだ——しかし実際には、生活力に溢れている。

「彼」は一切のものの否定者であり、縋るべき何ものもないことに絶望しているが、同時にあらゆるものに固く結びついている。(『未成年』ノート準備資料二 八月二十六日)

ドストエフスキーはノートに、「崩壊——これがこの小説の明白な思想だ」とかきとめていた。ヴェルシーロフはこのテーマを背負った人物として設定されている。主人公の「少年」——アルカージイを隅に追いやらないように留意してヴェルシーロフはかかれているから決定稿では「崩壊」のテーマはやや後方に退いているが、底流には敵存している。これまで人間を支えてきた価値体系が崩壊して、人は無援になった。その孤独は絶対的自由である筈だが、かえってそれに戸惑っているのではないか。旧来の「習慣」から抜け出られないまま、人間は相変らず「意味」を求める。その幻想から逃れられないうちは、新しい存在の確立はないとヴェルシーロフは確信している。人間に最も困難なのは、「ただそこに在るだけ」という認識を承知することである。世界をただあるがままにみる——このことの至難さをヴェルシーロフは知った人物である。

ドストエフスキーはヴェルシーロフに意味のない世界の可能性を探らせようとした。絶対者不在の無限の空間のなかで人はいかなる存在の形をもつであろうか。ヴェルシーロフと年齢的に似通ったスヴィドリガイロフは、ドストエフスキー文学のなかで最初に「意味」を明確に拒絶した人物であるが、彼の冷徹な認識と共通するものをこの「中年のスタヴローギン」はもっている。ただ、スヴィドリガイロフの人間は偶然に生成する「単なる粒子」という諦観めいた思念はヴェルシーロフのものではない。彼は人間だけの絶対の孤独の中でその無限の自由に耐え、絶対者不在の時代に相応する人間の新しい存在形式が創造されることを祈念している。人々は孤立して生き、それぞれの価値を自ら創り出さなければならぬ。世界から孤絶した人間同士がその孤絶を肌身で認識したとき、再び自分たちの存在が再生し、新しい時間に踏み込んだことに気づくであろう。それがどんな形のものかはヴェルシーロ

フにもわからない。少なくとも彼がスヴィドリガイロフと異なる点は、一步を踏みだそうとしているところである。たとえそれが混迷の方向であろうとも、スヴィドリガイロフのように一点に立ち続けることは出来ない。

人々は望んでいたように一人ぼっちになった。偉大な昔の理想は彼らを見棄てた。クロード・ローランの絵に描かれた招くがごとき偉大な太陽と同じように、それまで人々を養い暖めていた偉大な力の源泉は退いて行った。それはもはや人類の最後の日とも言うべきものだ。人々は自分たちが全くの一人ぼっちになってしまったことを卒然として悟った。大なる孤独を瞬時に感じたのだ。……孤独になった人間たちはすぐさまお互に前よりもしっかりと愛情をこめて寄り添うようになるであろう。今こそ彼らだけでお互にとつてすべてであると悟った人々は手を握り合うにちがいない。偉大なる不死の理想は消え失せて、それに代るべきものを見付けなければならぬだろう。不死そのものでもあった神へ向けられていた愛のあり余ったものはすべてみんなのもとの自然に、世界に、人間に、ありとあらゆる生きとし生けるものに向けられるであろう。(『未成年』第三篇 七章三)

ヴェルシーロフはこの意味を付与し得ない世界に自己の存在の形を確立する方途を見出そうとする。スヴィドリガイロフは単なる粒子であることに耐えようとしたが、ヴェルシーロフは単なる粒子であることから脱却して、そこに自分を納得させる何かを擲もうとしている。

かつてスタヴローギンも東洋、エジプト、アイスランドまで遍歴し、アトスでは終夜禱にも立通したと述べられているが、ヴェルシーロフは苦行を更に徹底させ、倫理的自己完成の中に価値を見出しその可能性に賭けようとしている。外に求められない意味を自己自身の中に求めようとするこの姿勢は、おそらく、信仰ではない。彼は苦行の行為そのもののうちに、その過程のうちに意味を見出そうとしている。それは必ずしも「彼岸」に到りつくことを期待してはいない。かつて地下生活者が行為の過程に目的があると言ったように、ヴェルシーロフも何もない無限の空間のなかでせめてそれに——踏み出すべき一步に己を賭けようとしている。対象ではなく、主体のなかに支

えを創って行こうとするのは、世界の意味——対象の意味を求めることの完全な断念がその認識の根柢にある。世界は世界として在るだけである。対象の世界を在るがままに観るが、そこに意味を求めることはない。實在の表現としての世界は崩落し、二元論は消滅する。これが『未成年』のテーマ「崩壊」の意味するところでもある。

事物はただそこに在るだけのものではない。世界は意味をになうのでもなく、存在は不条理でもない。不条理は不条理と観ずる人間の観念のなかにある。人は意味をもたない世界に慣れることが出来ず、その空白に耐えられないで意味を付与しようとする。その恐怖と不安が人間を意味に縛る。ドストエフスキーはスタヴローギンをかいたときから無意味の世界を探りはじめた。スタヴローギンの継承者ヴェルシーロフはその徹底である。ヴェルシーロフの中年の知恵がスタヴローギンより表面柔軟にでているが、その世界観は明確である。

「聖なるもの」の失われた時代、「共通の規範に対する信仰の消滅」した時代をドストエフスキーはこの主人公をとおして描こうとした。世界を意味づけることを放棄したとき、同時に「聖なるもの」も「共通の規範」も、その価値体系のうちにあったものはすべてその意味を喪失する。人間は本来意味をもたない、いわば「意味」を超えた「無重力地帯」で存在することになる。世界がただそこに在るだけということは、「意味」という足場を失って虚空のなかに人間が存在するということである。自ら足場を作って行かなければ、前進することは愚か、後退することすら不可能である。ヴェルシーロフの感じたものは、無限の自由であり、虚空のなかの孤独と恐怖である。これまで人はどれ程意味の世界で生きてきたかということに彼は痛感せざるを得ない。対象に足場を築くことが不可能ならば、自らの中に、自らの行為に足がかりを見つけて行かなければならぬ。そういう存在の形をヴェルシーロフはとろうとする。このような求道の姿はトルストイの主人公たちにもある。しかし、それは現象として類似しているだけである。ヴェルシーロフには苦行そのものに意味がある。たとえそれが無意味なことであろうと意味があるということとは——それしかヴェルシーロフの存在する形がないということとは、例えば、レーヴィンなどの理解の域外にある。

対象の意味を否定しながらなお、自分の行為によって自分自身に意味を創って行くということは、やはり意味から離れられないことであり、自己撞着であるかも知れない。しかし、それ以外に彼の思考が飛躍しないとしたら、

それを実践する他はない。本来、自己完成の目的もなく、苦行そのものに目標もないのではないか。苦行自体に——実践に意味を求めることも欺瞞であろう。それを承知しながらヴェルシーロフはあえて行おうとした。苦行を信じないところから苦行が始まる。このことを最もよく知っていたのはヴェルシーロフであり、作者である。

VII

イヴァンの否定は直接的な神の否定ではなく、神の世界の否定という形をとっている。彼は人間の認識の限界を認め、「物自体」にかかわる人類永遠の問題をあっさり承認する。「神の存在」も「最後の審判」も人間の悟性の限界外にあり、「兜を脱ぐ」しかないといヴァンは言う。彼は人間に与えられているものと、その根柢に在るものを分けて考えている。人類の眼前に在り、その中で日々人々が生活している世界はよく承知している。だが、その根柢に在る動機——世界を世界たらしめているものについては全く知るところがないし、知ることは不可能だとイヴァンはアリオーションに語る。イヴァンは意味を求めたがる人間の本性の弱点を逆手にとってそこに彼の認識の出发点をおいている。彼は「物自体」の認識を断念し、放棄する。しかし、彼のよく知るこの世界についてはそうは行かない。イヴァンが子供をダシにして「神の創った世界」を承認しないと言い出したのには明らかに魂胆がある。彼の「入場券の返上」は単に神の世界の否定ではない。神の世界を拒否しながら同時に世界そのもの——人間をも含めた存在全体を否定している。いわば、二重の否定であり、ウエイトはむしろ後者にある。イヴァンの関心事はすべてを否定してしまった後何処に身をおく場所をつくるかということである。イヴァンの認識の出發が全的否定であるとすれば、『カラマゾフの兄弟』の展開はイヴァンのこの「場」をめぐる進むことになる。作者はイヴァンと悪魔との対話を用意した。それはイヴァンの悪夢としてかかれています、そこには弟との対話のなかで語られなかった彼の本音の部分があらわれている。

イヴァンの悪夢には二つのエピソードが語られている。来世の存在を否定していた哲学者が死後天国の門をくぐった話と「地質学上の変動」——彼の人神論である。無神論者の挿話は神を心底から否定しきれないイヴァンの心情を表現している。

彼は「法律も良心も信仰も一切否定した」が、とりわけ来世の生活を否定した。やがて死んだ。彼はすぐ暗黒と死へ赴くものと思っていた。ところが目の前に——来世の生活が現れた。彼は驚き憤慨した。「これは俺の信念に矛盾している」と言ったものだ。これがため彼は裁判にかけられた。……裁判の結果、暗闇の中を千兆キロメートル歩いて行くよう宣告された。この千兆キロメートルの暗闇を通りぬけてしまうと天国の門が開かれてすべての罪が赦されるといふわけだ。……千兆キロメートルの暗闇を宣告された彼は突立ったまま暫くあたりを見回していたが、やがて道の真ん中にごろりと横になって「俺は歩きたくない。主義として行かない！」と言ったのだ。(『カラマーゾフの兄弟』(第十一篇九章))

このあと周知のように、「千年ばかり横になっていて突然歩き出した」哲学者は十億年以上もかかって天国の門に着く。門が開かれて二秒と経たないうちに彼は「千兆キロメートルどころか千兆キロメートルを千兆倍して更にもう千兆倍をも進めた程歩ける」と叫んだ。この無神論者の「ホザナ」にはイヴァンの一つの極が語られている。七ブード(百余キロ)もある商家の内儀に変身し、彼女の信じるものは何でも信じたいと願ったイヴァンは、神の世界一切を否定しながら、なお、その否定の空虚に耐えきれないものをもっている。ホザナを叫んだ哲学者の話のすぐあとに人神論をおいたのは、この「ホザナ」と拮抗関係を作者は作りたかったのである。

イヴァンの人神論は「地質学上の変動」と名付けられている。彼の人神は自殺を前提としていない。彼は神の觀念さえ破壊すれば以前の世界観は滅びると考える。精神の巨大化が生じ人神が出現するであろう。彼は自然を征服し天上の悦びに代る高遠な快樂を不断に感ずるようになる。人間は復活しないことを承知し生の瞬間性を知りながら無償の愛で同胞を愛し、誇りをもって生きる。ただ人類の無知がその時代の到来を遅らせている間は、この真理を認めた者がたった一人でも彼は新しい思想の上に自分の基礎を建てる事が出来る——人神となった彼は以前の奴隷の限界を超える。神である以上「何をして構わない」。

イヴァンの人神のなかにはラスコーリニコフもヴェルシーロフも含まれている。また、イヴァンの人神にオリジナリティーが稀薄であることも事実であろう。彼はひたすら「人神」という觀念で自分の在るべき場所を探ってい

る。それは常識的でもあり非常識でもある。

神のために法律はない！ 神の立つところは、すなわち神の場所だ！ 俺の立つところは、直ちに第一の場所となる……(同前)

彼は自由に思考しているようにみえて「神」という言葉にこだわる。神の観念に囚われ、そこから容易に脱出できない。千兆キロメートルを歩いて天国の門に達した無神論者を想像し、また、「地質学上の変動」の時代と並行してやって来る人神の到来を空想するイヴァンのこの分裂の中に彼の現在の境位がある。神の世界も、その創造物の意味も一切を否定しながら、イヴァンはなお新しい場所を見出してはいない。彼は依然として混乱の中にいる。今ある人間存在の形を彼は全面的に否定し、それを創造者に謹んで返上した「空白」の中にいる。その存在の形の欺瞞に気付き、それを打破ることによって人類の展望を拓こうとした点ではキリーロフと一致する。「人神」は人間存在の新しい形の試案の仮称であり、その観念の極端さに、むしろ、あまり意味はない。

ドストエフスキーは「ゴリラから人間まで」の時代の終焉を予感し、新しい人間の存在形式を探ろうとした。イヴァンの全的否定もこの過程の中にある。ドストエフスキーは人間存在の現在の形を人間が当然と考え、順応していることに違和感をおぼえる。それは「地質学上の変動」とともに変るべきではないのか。人類が絶対者を意識してからのごく短い時間のスパンのなかで定着しただけにすぎない形を人々が疑念をもたないことに、その怠惰に作家は不満を感じているのであろう。神の時代が終わったにしてもなお人間はその惰性から抜け出ることが出来ない。人々の惰性の打破を彼は「人神」という観念で行おうとした。「人神」は現在では荒唐無稽に映る。しかし、それは短い期間のなかで考えるからであらう。永遠にも比すべき長い時間のスパンでは実現しないと断言出来ない。千兆キロメートルを歩いた哲学者の挿話は、実はドストエフスキーの常人を超えた時間感覚を教えるものだったのかも知れない。

君はやはりわれわれの今の地球のことを考えているんだね！　だが、今の地球は十億回も繰り返されたものかも知れないじゃないか。地球の寿命が尽きると、凍ってひびが入って粉微塵に砕けて、細かい構成元素に分解して、それからまた水が大地の上の方を覆い、次にまた彗星が生じ、太陽が生じ、太陽から地球が生ずるんだ。この順序はもう無限に繰り返されているかも知れない。そしてすべてがハイフォンに至るまで以前と全く同じ形さ。不作法この上ない退屈さだぜ。(12) (同前)

周知のごとく、作者はイヴァンの対極にゾシマの認識をおいた。ドストエフスキーはイヴァンの哲学とは相触れない形で、いわば、すれ違った次元でゾシマの世界を独自に描いている。距離をおいてみたとき、読者はそこに相対応する二つの世界を併せてみるような仕組になっている。イヴァンの世界が既存の一切の存在の拒否によって新しい価値の創出を目論む世界であるとするなら、ゾシマのそれは全面的な受容の世界である。ゾシマには現在の形に何ら不足するところはない——あるとすれば、それは自己の認識と修練が欠けているからで、すべては自分の主体の中にある。人間は単なる粒子ではない。もし人間存在が宇宙の調和からはずれているとすれば、それは調和を感得する感覚が具っていないからである。人間は他律ともみえる宇宙の哲理の中に自律を求め、生かされながら、また逆に世界を生かして行く。人間が世界を表現することによって世界は初めて表現されて行く。この相互関係が世界と人間の間にあることを自覚するとき、人は自己の存在の形を確立するのである。一切の存在は宇宙の理の表現であり、実在の世界はその表現によって実在として実現する。表現を欠いた実在は虚である。万象を得て実在は実在となる。表現するものと表現されるものは、つねに相互に関係し、実在は表現であり表現は即実在である。

若年の頃、僧院建立のための寄進を募って地方を行脚していた時、ゾシマはこのことを体感した。彼はある大河のほとりで一夜を明かしたが、十八歳ばかりの農民出の若者とともになんの変哲もない平凡な風景を眺めているうちにこの感覚の閃くのを感じた。

明るく静かな暖い七月の夜で、広々とした川面からは水蒸気が立ちのぼり、われわれの気分を爽やかにして

くれた。幽に魚が跳ね、小鳥たちは沈黙し、すべてのものが静かに気高く、万物が神に祈りを捧げていた。寝ないでいたのはわれわれ二人、私とその若者だけであった。われわれは神の世界の美しさとその神秘について語り合った。一本一本の草、一匹一匹の小さな昆虫、一匹一匹の蟻、黄金色の蜜蜂、知性をもっていないすべてこれらのものが驚くばかりおのれの道を心得ていて神の神秘を証明し、自らその秘密を倦みなく行っているのである。⁽¹³⁾ (同前第六篇二章)

ゾシマはこの時点において自分の存在が単なる粒子ではないことを確信した。すべては宇宙の調和の中に在る。一木一草みな実在の表現点であることを眼前に在って語りかけてくる。それは今まで見た風景と同じであって同じではない。この特に変っているともみえない風景がゾシマの原体験となる。現世は神の世界の表現であるとゾシマは信じる。人はそれを受容することによって神とともに生き、世界を呼吸することが出来る。それは他律にみえながら他律ではない。たとえ微小な存在でも有機的な宇宙の表現点として世界の中に在る時、紛れもない確たる存在として人はそこに在る。自律的にそこに在る。

大成してからのゾシマは世界を円なるものとして考えている。円の半分は残りの半円の表現としてあり、現世を形成する。本質は隠れている半円の方にある——その部分が他界であり、蔭の部分である。人は蔭の部分から出て現世である半円を生き、また蔭に還る。すべての存在は表舞台に須臾の生命を輝かせ、回り舞台のように後の半円に消える。存在の生は表と裏のようであって、ある時は陽に、ある時は陰に表現されるが、生命そのものは不断に続いている。この生命の永続性こそが一切の存在の基本であり、人間の希望を支えているとゾシマは観じている。ゾシマはこの世の生を特別なものと思っではない。現世に生きていくことは、生命に陽の当っている時だということであり、いずれは翳る運命にある。表に現れた時にすべての存在は宇宙の理法を表現する。現世は他界の表現であり、表現されることによって他界は他界であり得る。存在の生命は現世と他界を循環し、生命は切れ目なく続く。人間存在の形はその生命のままに生きることである。そこには他律もなく自律もなく、生死の次元を超えて循環する生命の姿がある。人は生から死、無から有への時間を区切っているが、本来そういう区別は存在しな

い。ゾシマの他界は別の世界ではない。人間は自由に二つの半円を往き来するのである。ゾシマの信仰の根幹にある他界との接触感、世界が同じ円周の中に在るとすれば、当然であろう。ゾシマの存在の形はこの接触感を保ちつづけることによって独自の生命を得ているのである。

ドストエフスキーは、絶対者と遠く離れたところに立つイヴァンの存在の形を理解しながら、なおゾシマの姿にもつよく惹かれるものを感じている。それは相容れざる他律と自律の世界である。イヴァンは他律の拒否によって人間存在の新しい時代を創造しようとし、ゾシマは他律の中の自律を確立することによってこれまでの存在の形を保つて行こうとする。二つの世界のぶつかり合う次元は、有限存在者と無限絶対者が逆説的に矛盾的にかかわる場所であり、超越的なものにかかわる人格的自己の世界である。

ドストエフスキーはイヴァンの「新しい時代」の存在の形にも魅力を感じている。ただ、それは、イヴァン自身も承知しているように、人間の時間の単位ではほとんど無限ともいうべき時間を必要とするであろう。イヴァンの悪魔との対話は、彼の思想の可能性と不可能性を同時に示している。イヴァンの譫妄症と破滅はその企図の実現の至難なことを物語っている。

イヴァンが予想された必然的な道を迎えることによって作者はこの危険な試みから遁れ得た。彼はすでにゾシマが落陽を愛するような心境の中にいる。ドストエフスキーは「地質学上の変動」で最後の試みを果した。千兆キロメートルの道程を歩きはじめた哲学者のように、彼はゾシマの世界の静謐に賭けようとする。人神論の先達のキリーロフは最後には「生きても生きていなくても同じ」ところに出ようとした。もしかしたらイヴァンの人神も——その存在の新しい試みも、ゾシマの生死を超えた次元につながるかも知れない。現世の生命を特別なものと意識しなくなった時、そのこだわりから脱却した時人間は新しい存在の形を得るのではないか——晩年のドストエフスキーはここに「金色の光」の謎の一つの結語をみようとする。

注

- (1) ドストエフスキー三十巻本全集 第十九巻八論文・小品Ⅴ 六九頁 「ナウカ」出版所 レニングラート 一九七九年
 (2) V・ジチェルピナ他編『未刊のドストエフスキー』第二ノート 一七三頁 「ナウカ」出版所 モスクワ 一九七一年

- (3) 同前全集 第六卷ハ罪と罰V 四一七頁 同前 一九七三年
 (4) (3)と同書 二二二頁
 (5) 同前全集 第八卷ハ白痴V 五一頁 同前 一九七三年
 (6) (5)と同書 三四三頁
 (7) 同前全集 第十卷ハ悪霊V 九三頁 同前 一九七四年
 (8) 同前全集 第十六卷ハ未成年・創作ノートV 八六頁 同前 一九七六年
 (9) 同前全集 第十三卷ハ未成年V 三七八、九頁 同前 一九七五年
 (10) 同前全集 第十五卷ハカラマーゾフの兄弟V 七八頁 同前 一九七六年
 (11) (10)と同書 八四頁
 (12) (10)と同書 七九頁
 (13) 同前全集 第十四卷ハカラマーゾフの兄弟V 二六七頁 同前 一九七六年